



ヨーロッパは一頭の牡牛おうしから ゼウスとエウロペ

ヨーロッパという名前の起こりに、一頭の牛がかかっているのをご存じだろうか。

時は古代、フェニキア（シリアの地中海沿岸地方）を治めていたアゲノルという王に、エウロペという愛らしく、元気のよい、お茶目な娘がいた。

ある朝、侍女たちと牧場で遊んでいたエウロペは、そこに草を食べている大きくて立派な白い牡牛を見た。

侍女の一人が王女に牡牛に乗ってみたらと誘いかけると、彼女は喜び勇んで牛にまたがり、わき腹を蹴った。

牛は全速力で駆け出した。野を過ぎ、丘を越え、一気に海岸に駆け込み、波打ち際でも止まらなかつた。

潮の流れをもとめせず、エウロペを乗せたまま泳ぎ去った。

実はこの白牛は大神ゼウスであった。

前日エウロペを見かけて恋に落ち、彼女をさらうために姿を変えたのだった。

ゼウスは嫉妬深い妻ヘラの見張りを逃れるために、女性に近づくときは姿を変えるのだ。

レダには白鳥、ダナエには黄金の雨、レトにはウズラ、アルクメネには彼女自身の夫、そし

て、このエウロペには白い牡牛に変身したのだ。

ゼウスはもとの姿に戻り、エウロペを自分の生まれたクレタ島のイデ山の広大な洞穴に連れていった。

ゼウスの娘の「時の女神」たちが、この洞穴に立派なつづれ織りの壁掛けをかけ、床に花を敷きつめて、花嫁を迎える部屋を用意していた。

そこでゼウスは他のすべての人間の娘たちにまさる榮譽を彼女に与え、その子孫は彼女の名にちなんで名づけられる地上のまったく新しい場所に住むことになろうと約束した。

そういうわけで、ヨーロッパという名はこの王女エウロペにちなんで名づけられたのである。

ゼウスはエウロペへの求愛を記念して、星のシヤンデリアをかけ「牡牛座」とした。